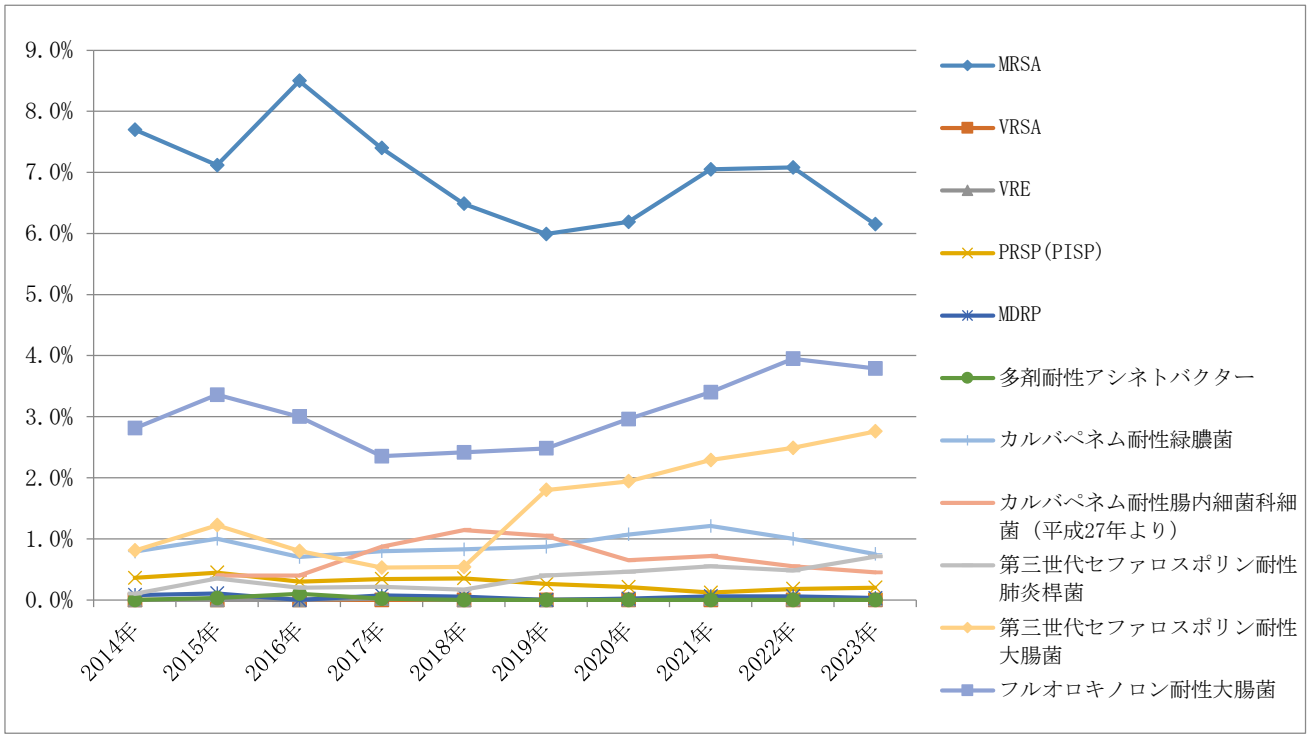
耐性菌分離率



抗菌薬の血中濃度測定の解析と同様、院内の耐性菌検出率を把握することは、抗菌薬適正使用を推進していくうえで重要な臨床指標の一つである。

当院は、2012 年より厚生労働省院内感染対策サーベイランス事業（JANIS）の検査部門へデータを提出し、還元された結果を公表している。

2023 年で目立った傾向は、検出率が 1%以上の菌種について注目すると、MRSA は年々減少傾向であったものが 2021 年から 2022 年まで 7%前後と上昇していたが、2023 年は過去最低ラインまで減少している。一方で、キノロン耐性大腸菌は 2019 年より増加傾向であり、第三世代セファロスポリン耐性大腸菌も同様に 2019 年より増加傾向である。特に第三世代セファロスポリン耐性大腸菌については 2019 年からの 5 年間で約 1%の分離率の上昇を認めている。これらは JANIS 参加施設の全体の分離率と比較して、未だ低い分離率ではあるが、今後はそれらの減少を目指し、AST（抗菌薬適正使用支援チーム）を中心に、より一層の抗菌薬適正使用を推進すると共に、水平伝播予防対策の強化など適切な感染管理に努めていく。

＊算出式：（対象菌の検出患者数／検体提出総患者数）×100（%）

（同一患者で異なる病棟から検体が提出された場合は 1 患者としてカウント）

データ提供：医療の質・安全対策部　感染対策室